

---

# 風と自転車と風紀委員長と

零崎稲織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風と自転車と風紀委員長と

### 【Nコード】

N4004D

### 【作者名】

零崎稲織

### 【あらすじ】

主人公の女の子が校則に違反してしまい、風紀委員長にお咎めをくらう。そこから思わぬ事態に……みたいな楽しい話だったらよかったです。

## お咎め（前書き）

雲雀さんはどちらかといえば無口なタイプなのでしょうが、この小説の雲雀さんはセリフが多めです（作者の力不足により）。その辺りをご了承くださいできれば幸いです。

## お咎め

自転車通学の際にヘルメットとタスキを着用することは、どの中学校でも義務づけられていることではないだろうか。

ここ並盛中学校もそうだ。

「ワオ、僕に齒向かおうなんていい度胸してるね」

その日、私はタスキを着用していなかった。そのため、風紀委員長に呼び止められたのだ。

「そんなつもりじゃ……」

事実、校則違反する気も、雲雀さんに齒向かおうなんて気もなかった。

偶然タスキを着用していなかった。そして偶然、風紀委員長にみつかってしまった。それだけのこと。なのに偶然の重なりとは恐ろしいもので、今まさに私は絶体絶命の危機に陥っている。

「噛み殺すよ?」

トンファーがこちらに向けられる。

この人の前では、ヘルメットをかぶっていても安心できない。

「ひいつ、ごめんなさいっ」

タスキをしていなかったこちらが悪いのだ。私は素直に謝った。だからなのだろうか、トンファーは振り下ろされなかった。

「……というのは嘘で、事情を話してくれば許してあげなくもない」

雲雀さんが微かに微笑んだ。気がした。雲雀さんって不良とかおつかないとかで有名だけど、そこまで悪い人じゃないのかもしれない。

私は雲雀さんを信じて、なぜタスキを着用していないのかを話すことにした。

「実は……なくしてしまっただんです」

「へえー。どこで？」

雲雀さんがわずかに詰め寄ってくる。

「それが……わからなくて」

「もっと詳しく話せないの？」

「あ、朝はちゃんとして来ました。だけど帰ろうと思ったら、なくなっていたんです」

「つまり、駐輪場でなくしたんだね」

「はい」

「今日のところはこれで許してあげるよ。だけどちゃんとつけて帰ってよね？」

雲雀さんはそう言うと、新品のタスキを差し出した。

「雲雀さんって、徒歩通学じゃありませんでした？」

「僕はいつでも好きな通学方法を選べるんだよ」

雲雀さんじゃなくても、みんな好きな通学方法を選んで並こ中こに通つてると思うんですけど……。あえてそこは突っ込まないことにする。せつかく見逃してもらえたんだから。

「あの、ありがとうございます。今持ち合わせなくて、お金は明日でもいいですか？」

「礼もお金もいらぬ。風紀委員として当然のことをしたまでだから」

雲雀さんは背を向けて言った。

冷たい風が学ランの袖を揺らしている。見つめながら私は、ありがとうございますと心の中で呟いた。

さっきもらったばかりのタスキを肩にかけ、私は風をきって前へ進む。急いでいるわけでもないのに、ペダルをこぐ足はいつもより力強く、それでいて軽快。なぜかそうせずにはいられなかった。

綺麗な夕焼けのせい？

心地よい風のせい？

今のところ平穩に1日が終わりそうな気がするから？

たぶん違う。

それだけじゃない。

私はそこで思考を止めた。

## 喪失

部活を終えた私は帰ろうとして、タスキがないことに気づいた。「あれ？ない、ないっ！」

昨日もらったばかりなのに、また同じ場所でなくすとはどういうわけか。懸命に探した甲斐も空しく、とうとう発見には至らなかった。風が強かったから、どこかへ飛んでしまったのかもしれない。そうして途方に暮れていたときである。

「ねえ、タスキはどうしたの？」

今会いたくない人、NO.1が声を掛けてきた。なぜ駐輪場に？もしかして今日は自転車通学だったとか？

「え？あ、ど、どこにいつちやっただんでしよう？」

今日こそは噛み殺される。私は強く目を閉じた。

「まさか、またなくしたなんてことはないよね？」

雲雀さんは迫って来る。謝る以外に助かる方法はない。ヘルメットは前カゴの中。かぶっている暇はない。

「許して下さいっ」

私は頭を下げた。もちろん、許してもらえとは思っていないかった。

「顔、上げなよ？」

「え？」

天は私に味方した。

「別に君をどうしようとかそういうこと考えてないから」  
「……………」

私は驚いて言葉が出なかった。

「もう帰りなよ」

「……………はい」

雲雀さんの顔は心なしか淋しげに見えた。

タスキなしでの下校。本来は許されることはないのだろう。なぜ

か雲雀さんは黙って帰してくれた。何か考えがあるのかもしれない。けど、別にどうしようとか考えてないって……どういっつもりなのだろう。女や子どもには手を出さないとか？それはない。中学生は立派な子どもだ。なのに並中生は被害にあっているのだから。じゃあ、戦闘能力なし＝噛み殺すに値しないとか？  
わからない。

とにかく助かったのだから、まあいいか。

## 駐輪場

今朝はタスキなしの登校でもお咎めなしだった（雲雀さんには会っていないが、風紀委員会さんたちは黙認してくれた）が、帰りはそうもいかないのです、お昼休みに購買部にて購入した。

駐輪車に向かいながら、鞆の中に入れたそれを探していると……。

「！」

トンファーを構えた雲雀さんが立っている。しかもあそこは、私の自転車の近くではないか。

少し離れてはいるが、話し声は聞こえた。

「ワオ、そこで何してんの？」

雲雀さんはそこにいた男子生徒に話し掛けた。

「……………」

彼は明らかに動揺していた。

「黙ってちゃわからないな」

「げ、ゲームだよ。やらねーとヤバいんだよ」

「へえー。どんな遊びだい？」

雲雀さんは興味深そうに尋ねる。

「知らねえよ」

「ワオ、口答えする気？」

雲雀さんと男子生徒の距離は少しずつ縮まっており、昨日の恐怖が思い出される。

「て、手紙で指示されたんだよ。コイツのチャリの鍵を取ってこいって。でないとオレがやられちゃう」

彼の言うコイツとは、紛れもなく私のことのようにだ。

「ワオ、今どき手紙？」

そこは驚くところなのか？

「ああ、オレだって驚いた」

あ、驚イタンダ……。

「ただのイタズラだろうってな。だけど実際。指示を無視ってボコられた奴がいるんだよ。つーか、アンタらじゃなかったのか？」

「噛み殺さないかね」

トンファーがカチツと音を立てた。

その後、彼がどうなったかは想像にまかせよう。

しかし、彼が風紀委員を疑うのも無理はなかった。並中のメモ用紙に書かれたその手紙にははっきりと“風紀委員”の名があったのだから。

## 行方

雲雀さんは応接室に風紀委員を集めて、手紙のことについて調査するよう言った。

なぜそのことを知っているのかというと、私も応接室に招き入れられたからだ。何でも、風紀が乱れたのは私のせいでもあるとかで「委員長、手紙を出したと思われる奴が判明しました。すぐに連れて来ますので、しばしお待ちを」

副委員長の草壁さんが、リーゼントをユサユサと揺らしながら言った。

並中生なら当然知っているだろうが、雲雀さん以外の風紀委員は全員リーゼントだ。何が良くてあんな時代を間違った髪型をしているのか疑問に思う。委員長である雲雀さんがそうさせているのだから、当の本人がリーゼントでないのが不思議だ。

「いや、僕が出迎えてあげるよ」

「はっ、かしこまりました。それでは参りましょう」

「……噛み殺す」

雲雀さんの目は闘志に燃えていた。

私は直接犯人には会っていない。そのひと

雲雀さんから応接室を出ないようにきつく言われていたからだ。

ただ、その人物が男性であり、隣町の黒曜中の生徒であることを知った。

風紀委員を語り、タスキを人に盗ませたその人は謝罪文を寄越し、タスキを返したいと申し出てきた。しかし私は、風紀委員を通して丁寧に断った。なんとなくもう自分の物でない気がしたし、新しいのを購入したので必要ないと。

こうして（雲雀恭弥様率いる風紀委員のおかげで）、タスキの行方とそれを盗ませた人物は明らかになった。

だが、なぜ知り合いでもない黒曜中の生徒がタスキを盗んだりしたのかは曖昧なままに終わってしまった。

## 真相

「今日は車で来たからこつちに用はないんだけど（自分で運転して来たわけではないと思います）」

そんなことを言いながらも風紀委員長は駐輪場まで来てくれた。監視兼お見送り？

「彼、君のことが好きみたいだよ。だから何か君の所有物を手に入れたかった。僕があげたタスキも誰かに盗ませて、そして捨てた」

一呼吸おいて雲雀さんは続ける。

「自分は一切手を汚さずに、君のタスキを手に入れたってわけだね」  
「……好きだから……ですか？」

私は雲雀さんの目を見て言った。

「で、今日はタスキあるの？」

雲雀さんは目を逸らし、上を向いた。

いきなり話を変えられ、私は不意を付かれたように感じた。あの恐怖を忘れたわけではないけれど。

「は、はい、買いました」

「言ってくれば用意したのに。まあいいや、貸しなよ」

「はい？」

今度は何が起きるのかと私はビクビクしながらタスキを差し出した。

「僕が名前を書いてあげるよ。今度は絶対なくさないでよね？」

「はい。一生大事にします！」

タスキを使うのは中学生の間だけなのに、不覚にも一生大事にするとか言ってしまった。

雲雀さんは丁寧な字で新しいタスキに名前を書き込んでくれた。

名乗ってなどいないのに、どうして私の名前を知っているんだろう。あ、全校生徒の名前をフルネームで覚えることくらいあの人はやってのけるんだ。それだけ並盛を愛している人だから。

「君となら……」

「え？」

「いや、何でもない。気をつけて」

雲雀さんはそれだけ言うと、颯爽とした足取りで去っていった。

今日も風が冷たい。私は全身の力を足に集中させ、ペダルを踏み込んだ。

君となら、群れられそうな気がするよ。

## 真相（後書き）

主人公のタスキを盗ませた黒幕は骸だといいです。謝罪文を寄越したのは別人ですが。主人公や風紀委員はじめ、並中生は何も知りませんという展開。このような駄文を最後まで読んで下さった貴方様に感謝感謝、で終わりたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4004d/>

---

風と自転車と風紀委員長と

2010年10月8日14時43分発行